

科学研究費助成事業（特別推進研究）研究進捗評価

課題番号	20002008	研究期間	平成20年度～平成24年度
研究課題名	自然免疫の包括的研究		
研究代表者名 (所属・職)	審良 静男（大阪大学・免疫学フロンティア研究センター・教授）		

【平成23年度 研究進捗評価結果】

該当欄		評価基準
○	A+	当初目標を超える研究の進展があり、期待以上の成果が見込まれる
	A	当初目標に向けて順調に研究が進展しており、期待どおりの成果が見込まれる
	B	当初目標に対して研究が遅れており、今後一層の努力が必要である
	C	当初目標より研究が遅れ、研究成果が見込まれないため、研究経費の減額又は研究の中止が適当である

（評価意見）

研究代表者は自然免疫分野のトップランナーとして我が国を代表する研究者であり、世界をリードしている。研究思考能力と実行力は圧倒的であり、研究の進め方に拡がりが見られ、当初の研究目的に沿って、着実に研究が進展している。これまでに多くの優れた研究成果（IKKによる転写制御、mRNAの安定性制御に関わる新規RNA分解酵素の同定など）を挙げ、研究内容・研究成果を積極的に世界のトップジャーナルに公表しており、今後も発展が期待できる。自然免疫を制御する分子群の同定、構造と機能解析、遺伝子欠損マウスの作出と生体内機能の解析に関し、研究者相互に有機的な連携が保たれ、研究が効率的に進められているため、すばらしい研究成果に結びつき、当初目標を超える研究の進展がある。総花的に見える点もあるが、実力のある研究者であるため、さらに研究を進めることによって、全体像を明らかにすることが期待できる。今後は自然免疫制御に関与する時空間的制御に関する研究の進展と成果も含め、自然免疫の総合的な理解に向けて全貌を明らかにしてほしい。

【平成25年度 検証結果】

検証結果	研究代表者は自然免疫分野の世界のトップランナーとして精力的に研究を行った。自然免疫活性化の分子機序では核酸刺激による樹状細胞の活性化に関する分子機序を明らかにし、転写後修飾系による炎症応答制御機序では新規RNaseや炎症調整因子 Regnase-1の働きを明らかにした。さらに、自然免疫担当細胞の研究では Trib1の作用の研究を通してM2マクロファージによる脂肪代謝の制御機構を明らかにした。これらの成果は本研究事業期間中に継続してNatureをはじめとした世界のトップジャーナルに公表された。
A+	本研究は、研究代表者の圧倒的な研究思考能力と実行力により推進され、研究が総花的に見える点もあるが、当初予想しなかった成果も得られている。 以上により、本研究の自然免疫分野の発展への貢献は極めて大きいと評価できる。